

5万匹の蚕

角永和夫展「S I L K」 入善・発電所美術館



5万匹の蚕の繭で高さ8メートル、幅12メートルの巨大な壁を作り上げた角永和夫の作品「SILK」
入善町下山の発電所美術館

実感と想像力 取り戻す試み

素材の命引き出す壁

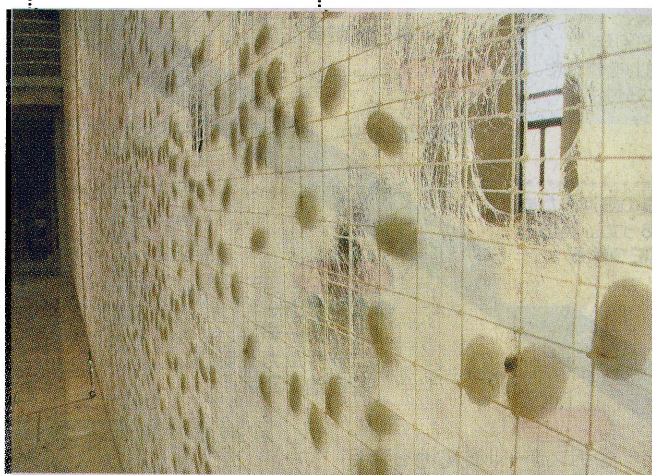
巨大な純白の壁が窓から差し込む光を受けてぼう然と浮かび上がる。歩み寄ると無数の繭と絡み合う糸が見えてきて、壁は蚕が吐き出した糸でできているのだと分かる。金沢市の造形作家、角永和夫(六〇)が五万匹の生きた蚕を使って「SILK」という名の作品を制作した。「絹」という身近な素材が織り成す圧倒的な光景は、素材が秘めている生命の輝きや膨大なエネルギーに気付かせてくれる。

角永は高さ八メートル、幅四メートルのアルミパネル三枚に漁網を張り、その上に五万匹の蚕を解き放った。蚕は上に登る習性があるため、偏りをなくするためアルミ枠を縦に回転するように設計。蚕は網を伝いながら糸を吐いて繭を白く染め、一週間ほどで繭の中に収まった。角永は「幼虫を解き放つまでが私の仕事。あとは素材で

■素材を見せる

角永は大学で建築を学んでいた一九六〇年代に現代美術と出会い、作家を志すようになった。八〇年代から日本で制作した作品をアメリカで発表し始め、丸太を極限まで薄くスライスして元の形に整えた作品などで注目を集めた。近年は溶

窓の光を受けて輝く蚕の繭



かしたガラスを垂らし続けた作品「Glass」で知られる。

制作の際に一貫しているのは、作為をできるだけ排除して素材の可能性を引き

ことで別次元の存在感を引き出した。見上げるばかりの壁は光を受けて神々しいほどに輝く。数万のさなぎを内部に秘めた繭は、静寂の中に命の胎動を感じさせ、成虫が飛び出す瞬間を夢想させる。

会場で作品を見て「養蚕業をしていた昔を思い出す」と語ったお年寄りがいた。その一方で「普段身にまわっている絹が、蚕によってできているということ初めて実感した」と話す学生もいたという。千八百

年ほど前から連綿と続いてきた日本国内の養蚕業も化学繊維や輸入品に押され、縮小の一途をたどっている。流通の発達で加工された製品があふれ、インターネットなど情報伝達技術が発達した現代。身近なものですら、その成り立ちを実感することが難しくなっている。「素材そのものを見せる」という角永の作品は、現代においてものに對する実感と想像力を取り戻す試みだとも言えるだろう。

敬称略
(稲)

■神々しい輝き

「SILK」も一つ一つなら顧みられることのない蚕の繭を、五万匹分集める



「角永和夫展—SILK」は十二月十七日まで入善町下山の発電所美術館で開かれている。北日本新聞社共催。入場料は一般五百円、高校・大学生三百円、中学生以下無料。十一月三日午後七時からツインドラムによるミュージアム・コンサートを開く。入場料千五百円、小学生以下無料。問い合わせは発電所美術館、電話0765(78)0621。